

インドネシア社会科学の現況

クンチャラニングラット*

Koentjaraningrat

I 戦前のインドネシア研究

16世紀の末以後の、インドネシア諸島、その民族および文化に関しては数多くの情報があるが、諸民族についての記録の大部分はオランダの船員、探検家、宣教師、聖書の翻訳家、植民地政府の官吏などの手によるものである。

これらの文献については、いくつかの包括的な文献目録がある。たとえば、*Bibliography on the Colonial Literature from 1595-1865*, 2 Vols. (Hooykaas, 1877) があるが、これには9巻の補遺 (Hartmann, 1895, 1932) がつけられ、1865年以後1932年までの出版物の書名が収められている。また、手ごろな *Catalogue of Books and Journals published in Indonesia between 1870-1937* (Ockeloen, 1939) があり、これは1938年から1941年の間の出版物に関する補遺をもつ。さらに R. Kennedy 他 の編集によるよく知られて手軽な *Bibliography of Indonesian Peoples and Cultures* (Kennedy, Maretzky, Fischer, 1956) がある。

しかしながら、インドネシアの民族と文化に関するこの大量の情報は、科学的分析には限られた部分しか信頼できないし使用に耐えない。インドネシアの民族と文化に対するオランダ人の学術的な興味は、植民地時代のや

や後の時期すなわち19世紀の後半になってやっとおこってきた。オランダの植民地政府が官吏や軍人、宣教師など植民地で成功しようとするあらゆる人々に、この国のさまざまな情報、インドネシア住民の言語や文化についての広範囲にわたる知識を要求しはじめたのは、ちょうどこの時期からであった。

このような興味から発生した体系的な知識は、インドネシア民族の社会構造、思维方法、慣習法、歴史、言語および農村経済などの学問分野の複合体、すなわちオランダ語で東インド諸島についての知識を意味する *indologie* という一つの題目で呼ばれるものに発展した。

発展の後期の段階にあった *indologie* は、わずかな主題にのみ専念してはいられないにもかかわらず、社会科学としては最小の分化をするに留まった。それは三つの方向に特殊化しただけであった。第1は多少とも文学・歴史を志向した研究を含むもので、第2はより社会・慣習法への志向をもった研究を、そして第3は社会経済学を志向した研究を含むものである。当時 C. C. Berg, C. van Vollenhoven, H. J. Boeke などのオランダのインドネシア学者は、インドネシア文化の一般原理や固有の構造を、すなわち Parsons の用語法に従えば、インドネシアの文化システムを調査することによって、インドネシア人の生活様式を深く理解することを意図した。彼らは通常、文献的研究あるいは比較による推論によってこの理解を得ようとした。これら

* 国立インドネシア大学文学部教授 (社会人類学)、LIPI 社会科学部長。本稿は1969年10月、同教授の東南アジア研究センターにおける講演原稿に加筆したものの邦訳である。

の方法を用いたため、彼らは文化のより古い側面に専念せざるを得なかった。その結果これらオランダの学者は、社会・文化の変動の問題にはほとんど興味を示さなかった。

この時期のインドネシア社会科学研究の中心は、オランダの大学や学術研究団体であった。インドネシア内では、それはほとんど完全にヨーロッパ人の手に握られていた。そのころ社会科学に関連した研究機関は一つしかなかった。それは法律学校 (Law School) であった。しかも法律学校を卒業したインドネシア人のうち、ごくわずかの者が調査その他の学術的活動に関与するのみで、インドネシアの知識人の大部分はそのまま植民地政府の官吏となっていた。筆者は、インドネシアの戦前における社会科学の展開について、これ以上詳しく述べる必要はないと思う。この問題にさらに興味のある人々に対しては、*indologie* の各部門の発展のあらましを与えるいくつかの展望論文をあげておこう。手に入るものとしては、インドネシアの慣習法 (*adat law*) 研究の初期の発展に関する C. van Vollenhoven の総括的な要約 (1928) と、もう一つは、短いがより最近のものを含む J. Prins の論文 (1962) がある。また、インドネシアの人類学の発展に関する簡潔ではあるが包括的な要約は、R. Kennedy (1944), G. J. Held (1953), A. G. Gerbrands (1959), P. E. de Josselin de Jong (1960) などがあり、社会学に関しては Heeron (1953, 1965) があり、ジャワの言語研究の網羅的批判的展望については Uhlenbeck (1964) がある。

II 戦後のオランダ *Indologie*

第二次世界大戦後、オランダがその広大な植民地を失って以来、オランダの *indologie* は以前の輝かしい地位を取り戻すことはできなかった。戦前は、オランダのインド学者 (*indologist*) は学問的訓練を受けた官吏とし

て、群島じゅうごく小さな地方にまで配置された。彼らはすべて、直接的集中的な観察を行なう機会をもち、インドネシア人の生活を理解しようとした。戦後のインドネシア革命は、主にジャワの農村地域においてゲリラ戦で戦われたので、オランダ人が保護地域の市街や町を離れるのは危険であった。ジャワ以外においても、オランダの官吏が研究に集中する機会はほとんどなかった。独立による正式の政権移譲ののち、行政に携わっていたすべてのオランダ人官吏が引き揚げ、オランダ人が研究する機会は完全に消滅した。

戦後に出版されたいくつかの慣習法研究と人類学的研究は、すでに戦前にスタートした研究の継続にすぎない。たとえば、Waropen Papuan に関する G. J. Held の研究 (1947) や、ジャワ人の社会構造の変化についての H. J. Burger の有名な研究 (1948—1949) があげられる。しかし当時、その大部分がなおオランダ人であったインドネシア大学の教授達は、研究活動を続けたが、特に社会科学では熱心な調査活動を行なった。これらの研究成果は、オランダの雑誌 *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* や、インドネシアの雑誌 *Madjalah Kebudayaan Indonesia* に掲載された。後者はオランダ人の学術団体 “Batavian Association of Arts and Sciences” の以前の雑誌の継続である。これらの雑誌のほかに、当時 *Indonesië* という雑誌があった。

インドネシアとオランダの政治的關係は、なお緊張にみちたものであり、両国が西ニューギニア問題で同意に達しなくなったとき状況はさらに悪くなった。両国はますます疎遠になり、オランダの大学のほとんどはインドネシアに対するその学術的関心を失った。しかし、Sociologisch-Historisch Seminar van Zuidoost Azië という研究機関を持っているアムステルダム大学は興味を持ち続けた。そ

の研究所長は W. F. Wertheim という社会学者で、インドネシアの専門家である。

オランダ人のインドネシアに対する興味が減少する一方、他方では、西ニューギニアでの彼らの調査活動はより活発になった。50年代の初期、彼らは西ニューギニアでの彼らの足掛かりを保つことができると考えた。西ニューギニアでの社会科学的調査の中心は、総督 J. Van Baal 自身によって設立されたオランダ人口研究所であった。彼は人類学者であったので、人類学的な調査が研究所の活動の重要な部分を占めることになった。したがって、この場合の人口研究とは、通常の意味の demographic な研究に限定されるものではなかった。研究所の存続した10年間に展開された活動の成果は極めてめざましいものであった。その調査活動の出版物のリストは、特に人類学では、J. V. de Bruyn の報告に含まれており、それは1957年にバンコクで開かれた第9回太平洋科学会議（Pacific Science Conference）に提出されたものである。

1963年に西ニューギニア問題が解決したあとのオランダとの友好関係の回復により、ゆるやかではあるが、若い世代の社会学者がインドネシアへの関心を呼び戻してきた。この状況は筆者が、1966—1967年にユトレヒト大学での講義のため、オランダに招待されたときに注目したことである。

Ⅲ オランダ以外の外国人の学術的関心

第二次世界大戦前はインドネシアの民族と文化に関する研究はオランダの独占物と考えられていたが、戦後になってオランダ以外の国々の学者が、オランダ人が関心を示さなかったあいだに生じたギャップを埋めるようになった。これらの学者は第1にアメリカ人、第2にオーストラリア人である。若干のドイツ人、イギリス人、ロシア人、日本人学者もインドネシアに注目しはじめた。

アメリカ人の関心は、第二次大戦後東南アジアに向けられた米国の一般的な注目を反映したものであった。インドネシア研究を始めたアメリカのセンターについては、三つの重要なものが言及されるだろう。第1は、コーネル大学の極東学科（Department of Far Eastern Studies）の東南アジアプログラムである。このプログラムの指導者 G. McT. Kahin 教授は政治学者でインドネシアの専門家であるため、初期のころは、東南アジアの政治とくにインドネシアの政治の研究が支配的であった。しかし、歴史学、社会学、経済学、人類学などの分野もプログラムの中で本来の位置を占めるようになった。このプログラムは、アメリカその他の国々の研究者のみならずインドネシア人をも含む、多くの調査研究者が博士課程の研究のための実地調査を行なうのを援助した。これらの研究の結果は多くが未発表の修士論文や博士論文になっているが、予備報告や中間報告、また相当な大きさの著書としても出版されている。インドネシアでのコーネル大学の調査活動の最も重要な成果としては、たとえば、H. Feith の著作 *The Decline of Constitutional Democracy in Indonesia* (1962)、1942—1945年の日本軍占領の間のインドネシアのイスラムに関するすばらしい研究である H. Benda の *The Crescent and the Rising Sun* (1958)、植民地経済から自立経済への転換過程を議論している J. O. Sutter の大著 *Indonesianisasi* (1959) や、インドネシアの共産主義を研究した R. McVey の *The Comintern and the Rise of Indonesian Communism* (1965) がある。最後に、Selosoemardjan の *Social Changes in Jogjakarta* (1962) をあげねばならない。これは、1945年から1949年のオランダに対するインドネシア人の武力革命の中心地ジョクジャカルタに起こった、極めて大きな社会文化の変動についての詳細な事例研

究である。

東南アジア特にインドネシアに対して学術的関心をもつアメリカのもう一つのセンターはマサチューセッツ工科大学 (M.I.T.) の国際問題研究所 (Center of International Studies) である。この研究所のインドネシア研究は、有名なカナダの経済学者 B. Higgins によって指導されている。しかし M.I.T. のインドネシア研究は経済へのみ向けられたわけではなく、むしろ経済発展の社会文化的、非経済的側面に焦点が当てられていた。この意味では、人類学者が最も有力な構成員であったモジョクト (Modjokuto) 調査隊の活動がよく知られている。このチームは Modjokuto という架空の名前をつけられた中部ジャワの地方都市を調査した。チームの指導者 R. Handon は言語学者であったが、Geertz 夫妻や R. Jay のような人類学者、A. Dewey のような経済学者などもいた。C. Geertz はチームの中で最も著書が多く、宗教に関するもの (1960) から経済史 (1963)、都市地域の社会生活の研究 (1965) にまでおよんでいる。Modjokuto 研究の別の重要な成果としては、たとえば A. Dewey の *Peasant Marketing in Java* (1963) がある。

アメリカにおけるインドネシア研究の第3のセンターは、地理学者 K. Pelzer が率いるエール大学の東南アジアプログラムである。このセンターは、戦前エール大学で特にインドネシアに関心をもっていた人類学教授 R. Kennedy の活躍のおかげで、インドネシア研究のセンターとしては最古のものである。Kennedy はまた、有名な *Bibliography of Indonesian Peoples and Culture* (1948) をはじめた人でもある。人類学者を主とする何人かの field workers が、エール大学の援助で博士論文のためのインドネシア調査を行なった。東南アジアプログラムの範囲外ではあるが、ここでは、インドネシアのメラネシア

部分すなわち西ニューギニアに関する L. Pospisil の研究をあげることができる。彼の研究は、慣習法の概念に貴重な貢献をなした *The Kapauku Papuans and their Law* (1957) という書物となった。最後に *Survey of World Cultures Series* のうちインドネシアを担当したのもエール大学であることを述べておきたい (McVey, 1963)。

これまで、アメリカによるインドネシア研究にふれてきた。筆者はすでに、インドネシア研究に大きな関心を寄せてきたもう一つの国としてオーストラリアをあげた。オーストラリアがインドネシアに興味を持つのは容易に理解でき、詳しい説明は不要であろう。インドネシア研究がはじまったのは、オランダのインド学者 F. H. van Naerssen によってインドネシア研究プログラムが設けられたシドニー大学であった。その後、インドネシア語の理解に重点をおいたインドネシア研究が、キャンベラのオーストラリア国立大学、クレイトンとメルボルンのモナシュ大学、ブリスベンのクィーンズランド大学、そしてパースの西オーストラリア大学で発展していった。オーストラリアのインドネシア専門家は歴史学者、政治学者、経済学者、言語学者、文献学者や地理学者から、人類学者や社会学者にまで広がっている。

イギリスやドイツ、フランス、ソ連などの学者は、インドネシアの社会科学研究ではあまり重要性を持たない。ここで筆者は、特に日本の社会科学について述べたい。もしまちがっていなければ、日本の社会科学者の東南アジア特にインドネシアに対する学術的関心は、第二次世界大戦の状況の中で現われてきたものである。その主要部分は歴史家によるものであって、インドネシアの初期の歴史の特殊研究をした人々や、岩生成一教授のようにインドネシア人あるいはインドネシアのオランダ人と日本人との初期の頃の研究

した人々、あるいは小林良正教授のようにインドネシアの独立闘争と国民運動の研究をした人々などがあげられる。上に述べた学者の著作は、Soedjatmoko の *Introduction to Indonesian Historiography* (1965; pp. 206-216) 所収の岸教授の論評 *Recent Japanese Sources for Indonesian Historiography* に掲げられている。歴史学者のほかに、第二次大戦以後のインドネシアに対する日本の関心は、東京都立大学の社会人類学者馬淵東一教授からももたらされた。教授は、ミナンカバウで人類学的な調査を行なった倉田勇氏のような何人かの彼の弟子にその興味をおこさせた。

IV インドネシア人による社会科学研究

現在、インドネシアにおける調査研究活動は、主に次の3種類の研究機関に集中して行なわれている。

(1) 大学

(2) 国家レベルの研究機関

(3) 政府各省庁の研究所

(1) 大学

独立後数年間は、インドネシアの大学には実質的な調査研究のできる社会学者はほとんどいなかった。大学の教授やスタッフの第一世代は戦前の官吏や行政官出身であったので、学術的研究にはほとんど経験をもたなかった。二世代目のスタッフは、1957年になってようやく各大学でさまざまな地位を占めるようになり、1960年以後はじめてより大きな割合を占めることになった。この若い世代の学者は、その補足的教育をアメリカの大学で受けてきている。彼らは通常、第一世代のオランダ流に教育された社会学者（主に、法律家）と比較して、学術的研究にはより多くの経験を積んでいる。しかしながら残念なことに、この若い社会学者達は学問的研究に専念するための時間にも資金にも、機会にも

恵まれていない。彼らはいつも過度に重い授業負担や広範な管理の職務を担わされている。彼らはまたしばしば、各種の政府機関から諮問を受けている。インドネシア政府はインドネシア大学の最も優秀な経済学者を奪い取ってしまった。

(2) 国家レベルの研究機関

これらの研究機関はインドネシア学術会議(LIPI)の一部として構成されている。社会科学の分野では、国立社会経済研究所(LEK-NAS)と国立文化研究所(LRKN)がある。これらの研究所は教育は行なわず、もっぱら調査研究に携わっている。それらはほんの4~5年前に設立されたばかりで、まだ、図書館を建てたり研究者を養成したりする予備的な発展段階にある。

これらの国立の調査研究機関は、多くの発展途上国にあるものと同じような状況にある。資金はほとんど政府から得ているので、政府の国家政策にかなうような研究が望まれている。たとえば現在では、第一次経済開発5カ年計画が政府の主な目標であるので、これらの研究機関のすべての研究計画は何らかの形で国家の計画と関係をもっている。

(3) 政府各省庁の研究所

たとえば、農林省は大規模で設備のよい農業研究部門を持っており、厚生省は設備のとのった公衆衛生の研究部門を持っている。しかしながら、各省庁付属の研究所の調査研究活動は、当面の問題に関連した実践的調査という特徴をあまりにも持っており、より基礎的な調査研究のための時間や機会はほとんど残されていない。

以上、インドネシアにおける学術的活動のセンターと考えられる三つのタイプの社会科学の研究機関について述べてきた。若い世代のインドネシアの社会学者は主としてアメリカ式の教育を受けたので、以前のオランダのインド学者がしばしば用いた思弁的帰納的

な分析よりも、むしろ数量的演繹的な手法を好むようになった。現在のインドネシアの社会学者が、当面の経済問題や社会的政治的な問題の、より実用的な側面に興味を持っていることは明らかである。

インドネシアの経済学者は、現在、最近の経済開発5カ年計画の意味を裏づけたり次の計画の起草を基礎づけるようなデータの収集に主として興味を持っている。この目的のために、彼らはインドネシア各地の経済調査を行なおうとしている。インドネシアの社会および文化の一般化が、その大きな多様性のためほとんど不可能であり、しかも特に外領に関する最も基礎的なデータが事実上欠如しているからである。

経済学者のみならず、インドネシアの社会学者や社会人類学者が大きな関心を抱いているこのほかのプロジェクトは、人口移動および都市化の問題である。この関連では、民族関係の問題に特別な注目が払われている。われわれインドネシア人は、民族グループの間の緊張は農村的な状況でよりも都市的な環境の中で著しいと見ている。これは、さまざまな民族が特に都市に集まり、都市が供給する限られた雇用機会を争っている状況を思いおこせば、容易に理解されよう。特に質的な分析方法と集中的なインタビューの経験を持った人類学者は、都市のスラムに住む労働者の研究には大いに役に立つだろう。幸いなことに、特にインドネシアでは長い学問的伝統がないため、社会学者と人類学者の間の非常に良好な協力関係はまだ保たれている。

社会学者は、インドネシアの政党システムの研究や官僚組織と汚職の研究をその特権と考えており、他方社会人類学者は、進歩を阻害しているインドネシア人の価値体系のような主題について研究している。

これらすべてのプロジェクトは、インドネシアの経済発展および国家開発に対する関心

と密接に結びついている。しかしインドネシアの一般的な状況は、まだ社会科学の幅広い調査研究を十分促進するに至っていない。有能な人材と経験のある研究者の不足は、なおわれわれの最も重大な弱点の一つである。社会科学的研究において、他の国々との共同計画や広範な協力が必要とされるところである。したがって、われわれインドネシア人はインドネシア研究を志す外国の社会学者の来伊を大いに歓迎するものである。

(松井範惇訳)

References

- Benda, H. J. (1958) *The Crescent and the Rising Sun: Indonesian Islam and the Japanese Occupation 1942-1945*, The Hague: W. van Hoeve.
- Bruyn, J. V. de (1958) *Anthropological Research in Netherlands New Guinea. Since 1950. The Oceania Monography*, X. Sydney: The University of Sydney.
- Burger, D. H. (1948-1949) "Structuurveranderingen in de Javaanse Samenleving," *Indonesia* II, (Structural Changes in Javanese Society): blz. 381-398, 521-537; III: blz. 1-18, 101-123, 225-250. 347-350, 381-389, 512.
- Dewey, A. C. (1963) *Peasant Marketing in Java*. Glencoe, Ill. The Free Press.
- Feith, H. (1962) *The Decline of Constitutional Democracy in Indonesia*. Ithaca, N. Y.: Cornell University Press.
- Geertz, C. (1960) "The Javanese Kijaji: The Changing Role of a Culture Broker," *Comparative Studies in Society and History*, II: blz. 228-249.
- . (1963) *Agricultural Involvement: The Process of Ecological Change in Indonesia*. Berkeley.
- . (1965) *The Social History of an Indonesian Town*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Gerbrands, A. A. (1959) "La Situation actuelle de l'Anthropologie Culturelle en Hollande," *Recherches et Dialogues Philosophiques et économiques*. Paris: Cahiers de l'Institut de Science Economique Appliquee.
- Hartmann, A., e. a. (1895) *Repertorium op de Literatuur Betreffende de Nederlandsche Kolo-*

- nien, voor zover zij verspreid is in *Tijdschriften en Mengelwerken I*. (Repertorium on the Literature concerning the Colonies, as far as those are included in Journals and other Publications). Oost-Indie 1866-1893 ; II. West Indie, 1840-1893. 's-Gravenhage (Deel I-II plus 7 delen vervolgen tot 1932).
- Heeren, H. J. (1953) "Report on the Development of the Social Sciences in Indonesia," *Transactions of the Second World Congress of Sociology*. London, blz. 22-25.
- . (1965) "Recente Sociologische Literatuur over Indonesie," *Sociologische Gids*, XII : blz. 179-186. (Recent Sociological Literature on Indonesia).
- Held, G. J. (1947) *Papoea's van Waropen* (Papuan of Waropen). Leiden : E. J. Brill.
- . (1953) "Applied Anthropology in Government: The Netherlands," *Anthropology Today, An Encyclopedia Inventory*, A. L. Kroeber editor. Chicago: Chicago University Press, blz. 866-879.
- Hooykaas, J. C. (1877) *Repertorium op de Koloniale Literatuur, of Systematische Inhoudsopgaaf van hetgeen Voorkomt over de Kolonien (Ooten de Kaap) in mengelwerken en Tijdschriften van 1595-1865, uitgegeven in Nederland en zijn Overzeesche Bezettingen*. Amsterdam (Deel I-II). (Repertory on the Colonial Literature, or Systematic contents of Publications and Journals on all the Colonies—East of Cape of Good Hope— published in Holland and the Colonies between 1595-1865.
- Josselin de Jong, P. E. de (1960) "Cultural Anthropology in the Netherlands," *Higher Education and Research in the Netherlands*, IV : blz. 3-16.
- Kennedy, R. (1944) *Applied Anthropology in the Dutch East Indies*. New York : Transactions of the New York Academy of Sciences, Series 2, VI, No. 5.
- Kennedy, R., T. W. Maretzki, H. Th. Fischer. (1955) *Bibliography of Indonesian Peoples and Cultures*. Revised edition. New Haven : Human Relations Area Files. Volume I-II.
- McVey, Ruth T. (1965) *The Comintern and the Rise of Indonesian Communism*. Ithaca, N. Y. : Cornell University Press.
- McVey, Ruth T. (editor) (1963) *Indonesia*. New Haven : HRAF Press.
- Ockeloen (1939) *Catalogus van Boeken en Tijdschriften, Uitgegeven in Nederlandsch Oost Indie van 1870-1937*. (Catalogue of Books and Journals, Published in the Dutch East Indies).
- Posposil, L. (1957) *The Kapauku Papuans and their law*. New Haven : Yale University Publications in Anthropology No. 54.
- Prins, J. (1962) "De Nederlanders en het Indoniesische Adatrecht," (The Dutch and Indonesian Adat Law). *Tijdschrift van de Vrije Universiteit van Brussel*, IV; blz. 30-52.
- Soedjatmoko, Mohammad Ali, G. J. Resink, G. McT. Kahin (editors). (1965) *An Introduction to the Indonesian Historiography*. Ithaca: Cornell University Press.
- Sutter, J. O. (1959) *Indonesianisasi : Politics in a Changing Economy, 1940-1955*, Ithaca : Southeast Asia Program, Cornell University. Vol. I-IV.
- Uhlenbeck, E. M. (1964) *A Critical Survey of Studies on the Languages of Java*. The Hague : Martinus Nyhoff.
- Vollenhoven, C. van (1928) *De Ontdekking van het Adatrecht (The Discovery of Adat Law)*. Leiden : E. J. Brill.